

茨城大学広報誌

C-mail

No.218

2017

特集

好きなものに向き合う



特集企画

茨大生に聞いた！
あなたが今、熱中していることは
なんですか？
それをこれからも続けたいですか？

4

ラグビー部

小園恵人さん

8

ボート部

倉坂悠子さん

10

演劇集団風ノ街

荒木倫子さん
本田芳瑛さん

12

熱気球同好会

白土宜行さん

14

よさこい海砂輝

鈴木夏海さん

16

岡倉天心・五浦
発信プロジェクト

丹治彩弥乃さん

18

大洗応援隊！

青山実樹さん

今村祐哉さん

20

管弦楽団

植木実紅さん

22

club' 89

渡邊広樹さん

24

特別企画

26 C-mail ができるまで

連載企画

28 マイフェバ - コーヒー対談 -

30 Life Place - 国際交流会館 -

32 ファッションスナップ° - 理学部スナップ° -

34 マイゼミ - 安藤寿男教授のゼミ -

36 いばだいめし - ボート部めし -

特集

好きなものに向き合う

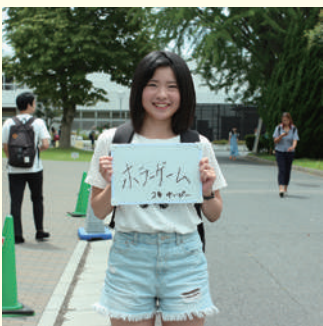
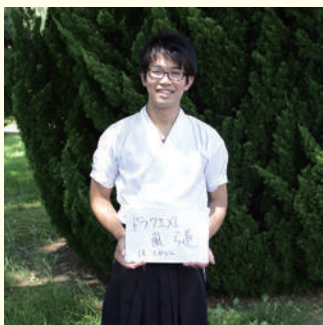
自分のやりたいこと、好きなことをしている時って楽しい。好きだからこそ、上手くいかないとき辛さも大きい。結果が出せないかもしれない、一生懸命やっても笑われるかもしれない。悩みや困難は尽きないけれど、それでもやりたいのは「好き」という気持ちが勝つから。

続けるかどうか葛藤しつつ、何かに熱中する茨大生たち彼らならきっと「好きなものに対する想い」を語ってくれるはず。そう考え、取材を申し込みました。

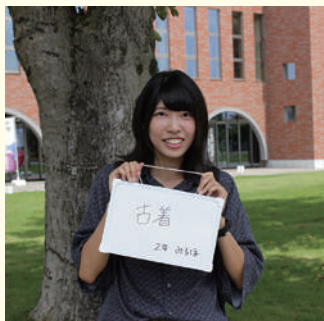
今回の C-mail では、自分のやりたいこと・好きなものに向き合う彼らの表情を切り取ります。

**CHECK!!**

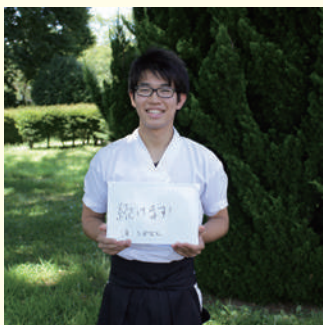
あなたが今、**熱中**していることは何ですか？



今号のテーマ「好きなものに向き合う」にちなんで茨大生 24 人に聞いてみました



これからも **続**けていきたい ですか？



このインタビューに答えてくれた茨大生のほとんどが「続けたい!」と回答。ですが、次ページから紹介するのは好きなことに向き合っていくなかで困難や葛藤と戦う人たち。



—「ラグビーが好きだから。」 熱く、真摯に戦う男たち—。

茨城大学 ラグビー部



↑茨城大学ラグビー部創立 70 周年記念式典での試合の様子。茨城大学（左側） 対 千葉商科大学（右側）。この日は、OB の方も大勢駆けつけて応援した。

■「人数不足でできないんじゃないか」という不安

ラグビーは 15 人制のスポーツですが、部員はギリギリの 15 人でした。これじゃまずいと思って、4 月から勧誘に力を入れた結果、7 月には 17 人に増えました。ただ、全員が毎日の練習に参加できるわけではないので、人数が少ない日はできる練習も限られてきます。だから何をやるかということよりも、何ができるか考えながら練習することを大切にしています。人数が少ない中でもより質の高い練習をするために、社会人クラブや高校生と練習する機会を設けることも。部員のみならず「チームはお前を必要としているんだよ」という声をかけるように心がけています。そう言ってもらえると嬉しいと思うので。

■かけがえのない仲間たち

僕よりも後輩の方がラグビー上手いんですよ。小学生から続けてる奴もいる。だからラグビーのスキルに関しては、練習の時も試合の時もすごく頼りにしています。それにみんな人数が少ないことを言い訳にしないんです。どんな練習も真摯に取り組むところがラグビー部のいい所。ラグビーは「One for all. All for one.」のスポーツだから、誰一人として欠けてほしくないという想いはありますね。



■キャプテンとして

僕は強いリーダーシップを持っているタイプじゃない。けど、キャプテンになった時は、自分の中に思い描いていた「理想のチーム像」を実現できるんだ、という期待を感じていました。ひとりひとりがチームの主人公だと思えるように支えていくのがキャプテンとしての僕の仕事です。正直、結果も良くてチームとしてまとまりもあった去年の代と比べてしまうこともあるんですが、それを引き継ぎながら今年うまく僕のカラーを出していけるよう取り組んでいます。

■自分たちで考え、形にすること

練習のメニューを考えるのはもちろん、試合中も考えることがたくさん。部員同士のコミュニケーションがないと勝てません。コール（指示やよびかけ）が飛び交っているんだけど、一瞬のうちに試合状況にあったコールを考えなきゃいけないって、これがなかなか難しい。

僕にとってラグビーは、極限まで集中できるスポーツで、試合中はかなり熱くなれる。勝つために、ひとつひとつのプレーでチームを引っ張る存在でありたいです。

コールが飛び交う試合中の様子→



小園恵人さん
(人文学部人文社会学科4年)
茨城大学ラグビー部キャプテン。
現在ラグビー部では、新入部員を
大募集中。

取材を受けてくれたのは小園さんだったが、他の部員の方にもお話を聞くことができた。

みなさん口をそろえて「ラグビーが好き、真剣にやりたい」と言っていて、ラグビーに対する熱い気持ちを感じた。ラグビーに向き合っているときの真剣なまなざしが、彼らのプレーによりいっそう迫力を持たせているのではないか。



■打ち込める場所

私は大学受験があまり上手いかわなくて、大学でなにか一生懸命打ち込めることを見つけたかったです。それがボート部なのかなって思ったから入りました。入った当初は朝5時からと夜9時までの活動でクタクタになりました。毎日自転車のカゴとリュックいっぱい部員たちの食料を買って。空きコマの時間もマネージャーの仕事をこなしていたので、体方面でかなりきつかったです。それに結局舞台上がるのは選手だから、選手の思っていることをちゃんと理解してあげられてないんじゃないかと悩んだこともあります。

でも、毎日みんなと会ってご飯を食べるのが、家族みたいでとにかく楽しかったです。ボート部の活動をする中で、サークルとバイトと勉強をそこそこやる、みたいな「大学生はなにか一つのことを真剣に追い求めることがない」という価値観が変わりましたね。

■ない・ない・ないの環境でも

辞めなくなった時はいっぱいあります。時間がないし、お金も稼げないし。実際それで辞めてしまう人も多かったです。そこまで部活に力を注げないとか、勉強をもっとしたいって私自身も思ったことがあります。だけど、ここでしかできないことの方が多くいます。お互いの意見を言ってみんなの息を合わせないと成り立たないスポーツだから、本当の信頼関係が生まれること。それにこんなに本気で活動に打ち込むっていうのもボート部でしかできないことですね。

きついとか寂しいって思う時もあったけど、絶対に辞めないと思いました。

■マネージャーとして

正直、今までマネージャーをやる人の気が知れないって思っていて。何が楽しくてやっているのかわからなかったですね。でも自分でやってみると本気でやっている人を応援するのが楽しかったです。それに、選手たちのために何か自分にできることはないか考えるようになりました。選手たちが真剣にやっている姿は本当に純粋にかっこいい。忙しくても続けるのは、こんなに頑張っている人たちを支えたいのと、勝つ姿を見届けたいからですね。今の目標は日本一達成。チーム一丸となってこれからも頑張っていきたいです。

倉坂悠子さん

(教育学部養護教諭養成課程2年)

茨城大学漕艇部マネージャー。

マネージャー陣の主な仕事は、マッサージ・テーピング・部員たちの食事作り・100万を超える額の活動費会計・練習の様子を撮影してYouTubeにアップするなど。

演劇集団風ノ街

茨城大学の演劇サークル。コメディからミステリーまで、自作の脚本で幅広い演劇作品を上演。前公演では観客の度肝を抜くコメディ劇を披露した。

■演劇に対する気持ちの変化

高校のときから地元の劇団で活動していました。最初はただ役者として演劇を楽しむだけだったんですが、大学生になって外部の劇団さんの公演に客演させていただいてから、意識が変わって。自分たちが楽しむより、お客さんが「観に来てよかった」と思えるものをつくるべきじゃないかって。

だから92回公演では、風ノ街を革命しようと考えました。公演全体に指示を出せる演出の立場で、私が学外で得た考え方を風ノ街に反映したかったんです。

■演出としての挑戦 『風ノ街革命』

たとえば稽古の仕方を変えました。いままでのように演出が役者の動きを全部指示するのではなく、役者たちに演技を自主練してもらったんです。それを稽古で確認して、遠慮なくダメ出しをしました。集中できていない役者には「お客さんからお金と時間をもらってやってるんだよ」と意識を共有しましたね。

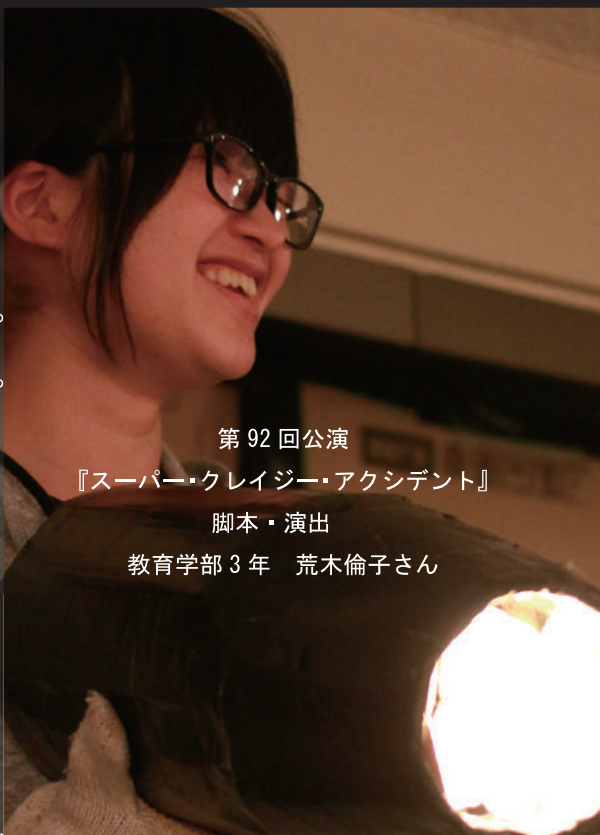
ただ雰囲気は悪くしないように和ませて…そこはうまくやれる演出になりたいって信念を持ってました。

■悩みながらも得られた成果

深夜に同期とお酒を飲みながら「悩んでる役者にどう声をかけたらいいんだ…」と相談したこともありましたね。役者に「ダメな演出」と思われてないかって怖さもありました。

でも以前、初演出をしたときは精神的に折れてしまったので、今回は何があってもどっしり構えてようって決意してました。結果、今回は折れなかったし、役者陣からも「自分たちで考えるやり方がわかったから、苦しかったけど楽しかった」と言ってもらえました。

だから革命は失敗ではなかったかな、と思います。まだまだやりたいことはありますけどね。



第92回公演

『スーパー・クレイジー・アクシデント』

脚本・演出

教育学部3年 荒木倫子さん





■メンバーに合わせてサークルも変化するべき

会長になってから、風ノ街でどれだけみんなが楽しく過ごせるかを大切にしています。30年くらい続くサークルだから、団員も変わっていく。それに合わせて、今回の革命のようにサークルのスタイルも変わっていくべきだと思うんですね。「みんなが楽しくやりたいようにやれるようにする」のが自分の務め、という意識があります。

■変わり続けるサークルに

自分自身、風ノ街じゃなかったらここまで楽しくなかった。自由度が高くて、やろうと思えばなんでもできる。同時に、やろうとしなきゃ何も始まらないなっていうのも分かりました。後輩たちには、主体的に考えて、風ノ街をさらにつくり変えてほしいなと思います。

プロ意識を持つ荒木さんと、楽しむことを忘れない本田さん。好きなことを突き詰める真剣さと、純粋に楽しむ気持ちは、どの団体にも必要なものだと感じた。



風ノ街会長

人文学部3年 本田芳瑛さん



熱気球同好会

■熱気球同好会では、どんな活動をしているのですか？

普段は栃木県・群馬県・埼玉県・茨城県の県境にある渡良瀬遊水地で飛んでいます。日帰りで行ったり、たまに泊りがけで合宿したり。あと、地方の大会に行くこともあります。大会に行ったときは地元の人と話したりもします。車での移動時間が多いですが、その間はメンバーで喋ったりして、和気藹々とした雰囲気です。

■大会ではどんなことをするのですか？

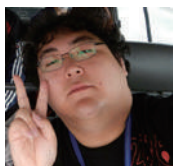
定められた目標地点に向かって飛行していくことが競技の内容ですね。高度によって風向きが違うので、高度調整で飛ぶ方向を調整します。大抵うまくいかないんですけど、その分うまくいったときの嬉しさはすごいです。大会で気球に乗るのは一人なので、残りのメンバーは地上からパイロットのサポートをします。人望とやる気がある人がパイロットに選ばれるんですけど、それは一人のパイロットを残りのメンバーで支えるという特徴にもよるものなんです。

■社会人で気球をやっている方や、大会に行った先の地域の方との交流について教えてください。

いつも渡良瀬遊水地で会う人とは、よく飲みに行ったり、たまにその人の家に泊めてもらったりすることもあります。その人の家で一緒に飲んだりとか。気球のために仕事やめたりする人もいて、面白い人がたくさんいますよ。大会に行ったときには、宿泊している町が歓迎会を開いてくれたりとか、大会側がパーティーを主催してくれる場合もあって、そこで地元の人と食事したりお話をすることが多いです。歓迎会で、滞在了市の市長にコンタクトレンズを探してもらったこともしましたね。

■気球の楽しさを教えてください。

景色がいろいろのも一つなんですけど、やっぱり空を飛ぶこと自体の楽しさですね。ただ飛んでいるだけでも楽しくて、全く飽きません。自由に空を飛べるっていうことの快感、それに尽きると思います。



白土宣行さん

(理学部理学科地球環境科学コース4年)

熱気球同好会では、パイロットを務める。





■よさこいとの出会い

私は、小・中学校での伝統芸能に触れる授業でソーラン節を知りました。その時はただ、友達と踊るのが楽しいという印象しかなくて。中学校を卒業し、ソーラン節を踊る機会がなくなって、何か楽しいことをやりたいと思っていたら、ソーラン節の指導に来てくれたOBOGの先輩方が所属しているチームに、縁があって入ることになりました。そこで色々なよさこいの曲と触れる機会があって、よさこいって楽しいんだと思ったんです。その後大学入学にあたって、茨城の学生のよさこい文化を盛り上げたいという夢ができて、よさこいサークルを作ろうと決めました。

■ひとりぼっちからのスタート

サークルを作ろうと思ったはいいいけれど、最初はサークルの作り方すら分からなくて。人数や顧問の規定があることを知って、まずは皆に認知してもらおうと思いました。TwitterやFacebookで情報発信を始めて、やっと成果が出たのは入学前の春休みでした。LINEの新入生のグループで、私の呼びかけに反応してくれた子や何か新しいことを始めたいという子がいたので、ひたすらコメントを送っていきましたね。そして入学後に会おうと決めたのが、初期メンバーとの出会いです。今思えば図太いにも程があるけれど、私の図太さや熱量をかけてくれたのだと思います。まずは、よさこいとは、という基本中の基本から始め、その後徐々に下級生が入ってきてくれて、やっと3年目になりました。今まで一緒にやってきたメンバーの皆には、仲間になってくれてありがとうございますと伝えたいです。

■結（ゆい）

よさこいの一番の魅力は「つながり」にあると思うんです。踊り子やお客さん、スタッフなど、よさこいを通してつながれる縁は無限大です。だからこそ、ただ踊るだけじゃなく、どうすれば喜んでもらえる演舞ができるのかを考えなければいけません。よさこいは、思いやりを持って相手と向き合うことの大切さを教えてくれるんです。メンバーにはそのことを実感しつつ、よさこいの楽しさを発信してってもらいたいですね。サークルは立ち上げましたが、入学時に掲げた、水戸・日立・阿見の全てのキャンパスにあるサークルという目標はまだ達成できていません。これからも常に感謝の気持ちを忘れずに、仲間と活動していきたいです。

新しい何かを一から始めるには、莫大なエネルギーを必要とする。時には未知への不安に押し潰されそうになるが、周りを見渡すとそこにはきっと自分を助けてくれる誰かがいる。人と人の不思議な縁、まさに結は想像以上の力を発揮する、と取材を通して実感した。





鈴木夏海さん

(教育学部情報文化課程3年)

茨城大学よさこいサークル「海砂輝」の創設者であり、現代表を務める。

写真は水戸黄門まつりでの演舞の様子。

地域発信で自分発見

■五浦プロジェクト発足

プロジェクトは、大学からの声掛けをきっかけに去年の5月後半に発足しました。茨城県北茨城市五浦の魅力の商品開発や地域でのワークショップによって発信しています。最初は1年生4人だけでしたが現在は様々な人が集まるプロジェクトになりました。具体的な活動としては、昨年9月にサザコーヒーと共同で「五浦コーヒー」を開発しお披露目しました。国際人である天心にゆかりの深い米国ボストンのコーヒー史実や天心の思想“Teaism”に基づいて作ったコーヒーであるということをどうすれば一番伝えることができるのか試行錯誤することに時間がかかりましたがそれが実現したときは今までの苦労を越える嬉しさを感じました。

■未知なる出会い

プロジェクトの魅力は二つあると考えています。思ってもいなかった人達と出会えること、自分の力がどれくらいなのか分かるということです。都内の学生で五浦の旅館の息子さんも参加してくれているんです。他大学の教授とお話する機会もあるのでプロジェクト以外の自分の興味を発見してそのことについて質問することもあります。自分の力が分かるというのは自分に足りないものがどんどん分かったということです。私は高校までは自分の思い通りになることが多かったけれど大学では色々な人がいて、もちろん自分よりも知識のある人も多くいて。そこで人の考えを理解しようと思うようになりました。プロジェクトをやることで、客観的に考えられるようになったと思います。つまり、心に余裕ができたということかな。

■何のために続けてるんだろう？

実は飽きっぽい性格なので、すごく熱血的に行動することは苦手です。ただなぜプロジェクトをやるのかと言われると、自分の力を知って、自分を諦めたくないからというのが答えだと思います。プロジェクトは、今の自分を創る大切な要素になっています。それでも、形として効果が出ないこともあって、何のためにプロジェクトを続けているんだろうかと不安になることもあります。自分は結局どうしたいのか気になってしまっ。そういう風に不安になったときは、自問自答です。「もうやめる？」と聞いて、直感で悔しければ続けるべきなんだと思って続けています。

■世界を目指す

自分達のしていること、活動が有名になって、いずれは世界にも五浦を発信していきたいです。皆がびっくりするようなことができればいいな。今考えている企画もありますが、それはまだ秘密です。プロジェクトは私が卒業しても続けてほしい。



丹治 彩弥乃さん●人文学部社会科学科2年
五浦発信プロジェクト代表。写真(右下)は、茨城大学内の
サザコーヒーで開催された「茶の本ゼミ」の様子。この日は
地域の人たちや茨大生と、岡倉天心の「茶の本」を読み解いた。

Editor's note

プロジェクトは自分の全てではなくあくまで自分の一部と冷静に語る丹治さん。しかし野望を語る熱い目が印象的であった。今後のプロジェクトの発展が楽しみである。

■大洗応援隊とは

大洗町は茨城県の中でも東日本大震災の被害が特に大きかった場所。大洗応援隊は、復興のための情報共有の場としてFacebook上に作られた団体だった。「せっかく出来たから、このまま残そうって。茨大の先生と学生が受け継いで今の形になりました」

■なぜ続けられるか

今村さんと青山さんは笑いながら話す。「辛いと思っただことはないです。初対面の方々和交流して仲が深まることは自分にとっていいことだし、社会貢献の1つなのかなとも思います」「なんだかボランティアっていう意識は低いですね。地元の人がどンドン話しかけてくれるんですよ。『あ、大洗応援隊ね！カフェやってるでしょ。』って知られていることが嬉しいです。普段なかなか無い大人の方や社会人の方との交流があるのは魅力だと思います。メンバーが少なくても活動が思うように進まなかったり大変だなと思うことはあるけど、達成感の方が大きくて。楽しくてずっと続けてます」

■街の一角、憩いの場

『大洗町を元気に』をコンセプトに、呉服屋さんを改装して月2回『ほげほげカフェ』を運営しています。ちょっとした軽食を出したり「地域振興のマップ作りには力を入れてます商店街で100以上の店舗に1ヶ所ずつ聞き込みをしました」「カフェではガルパンキャラの名前の紅茶を出したらすぐ売れましたね(笑)」大洗町はアニメ『ガールズ&パンツァー』の聖地でもある。カフェでは時にファン同士の会話に花が咲く。

■繋ぐ

カフェの中でちょっとした世間話、ガルパンファンの熱い語り。いつも温かい人々の会話であふれている大洗の商店街の一角。「ほげほげカフェの目標は10年続くカフェ。地元の人たちや観光客の方々とは、ただの『店員とお客』じゃなくて、『友達』くらいの近い距離でいたい」大洗応援隊のメンバーは今日も商店街の今と未来を、地元の方と観光客を、大洗というフィールドで繋げる。『ほげほげ(こころゆくまで、たっぷり)』と。

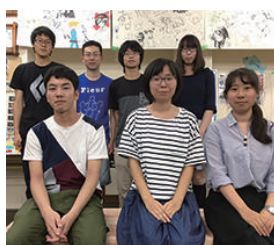


■大洗応援隊

大洗にて、ほげほげカフェ運営を中心とした地域振興活動をしている。茨城大学の社会連携事業の活動の一つ。

代表

青山実樹さん（理学 2年）※前列中央
今村祐哉さん（人文 3年）※後列中央



Ibaraki University

Orchestra



今回取材を受けてくれたのは…
植木実紅さん（写真右端）
（教育学部情報文化課程 2年）
茨城大学管弦楽団 バイオリン担当。

■管弦の魅力

オーケストラは特別な魅力を持っていると、私は考えています。それは、管楽器・打楽器・弦楽器の3つがあるからこそ作り上げられる音楽だということ。吹奏楽とよく間違えられるのですが、吹奏楽は管楽器と打楽器の2つだけ。吹奏楽にも十分迫力がありますが、たまに他の管弦楽団の演奏会を聴きに行くと「ああ、私はやっぱりオーケストラで演奏したいんだ。」と改めて思いますね。管弦をやっている1番感じることは、みんなで一つの音楽を作る楽しさです。それはもう、言葉では表現しきれません。

私は、小学生の時からバイオリンを始めてオーケストラをずっとやってきました。始めたきっかけは両親の「どうしても子どもにバイオリンをやらせたい」という意志です。兄と姉がやっているのも小さいときから見ていたので、他の選択肢はあまり考えたことがありません。1度だけ、地元のオーケストラで兄弟一緒に演奏したことがいい思い出。これからの目標の1つとして、もう1度兄弟3人で演奏したいです。

■「めちゃめちな演奏」から「理想」へ

私が一番好きなのは課題曲の楽譜が配られてすぐ、最初のぐちゃぐちゃな合奏です（笑）。なかなかひどいですよ。弦分奏（弦楽器奏者だけの演奏）の時に理想の演奏イメージを言い合うのですが、言葉で音楽を表現するのはとても難しいことです。でもそこで、音の表情を表す言葉が団員同士で一致すると団結が強まります。その音を目指して、みんなで音楽を作り上げていくのが管弦の醍醐味。最初のめちゃめちな演奏があるからこそ、自分の成長と、みんなの成長を感じることができます。だから、ワクワクするし好きなんです。



茨城大学管弦楽団
第43回定期演奏会



12.16 ④ 13:30開場 指揮 吉莊恭啓
14:00開演
茨城県立県民文化センター大ホール

♪シベリウス
◆交響詩「フィンランディア」Op.25 入場料
前夜 4600
当日 2800

♪ハチャトゥリアン
◆組曲「仮面舞踏会」

♪チャイコフスキー
◆交響曲第5番 ホ短調 Op.64

QRコード

※このコンサートは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、公演中止となる場合がございます。中止の場合は、公演から1週間前（www.aizu.ac.jp）までご連絡ください。

お問い合わせ
0295-2798-4128 13000000@fukuoka.ac.jp

←練習中の様子。

12月には、第43回定期演奏会を控えている。

■音楽は楽しむもの

私、音楽を仕事にはしたくないんです。これから趣味として続けたい。仕事としてやらされてる感があると嫌なので（笑）。子どもの頃はあまり練習が楽しくなかったのですが、だんだん音楽を楽しもうと考えられるようになりました。演奏会の本番が近くなると、土日さえも1日7時間ほどの練習が毎週あります。長時間にわたる練習の集中力を保つために気をつけていることは、1回1回の演奏を楽しむことです。音楽を「楽しくない」と思ってしまったり練習も上手くないし、同じ曲を弾いていても1度としてまったく同じ演奏なんてないので、毎回楽しんで練習しています。

■やりたいから続けられる

スランプは定期的にはやってきます。楽器は毎日弾かないと音が出づらくなってしまいうのですが、アパート暮らしではそうはいきません。そんなときは色んな焦りや葛藤があります。楽器は、弾けば弾くほど響きが変わっていくんです。毎日弾いていると、自分の理想とする音が出やすくなったり、逆にスランプの時は指が全然動かなくなったり。

茨城大学の管弦楽団は、年2回の演奏会やその他の依頼演奏に出演しています。その際にかかるホールの賃借料や、楽器の指導員の方への謝礼なども団員で負担しているため、金銭的な負担も決して少なくありません。管弦楽団には60名ほど団員がいますが、全員が活動しているわけではないので人手は常に足りない状況です。お金もそれなりにかかるので、続けるのも大変です。でもやっぱり、やりたいから続けていけるのだと思います。最近、バイオリンケースを持っていると安心するようになりました。降ろしたときは、あ〜重かったって思うんですけどね（笑）。

取材をする中で、いかにバイオリンが植木さんの生活の一部になっているかということを感じた。

彼女は自分の意志でバイオリンを始めたわけではないのに、今ではその楽しさに魅せられ自分の理想の演奏を追いかけている。また、バイオリンに対して「楽しさ」を重視する彼女は、仕事ではなく趣味として続けていくことを選んだ。人生において自分を楽しませてくれる、「大好きなバイオリン」に意図せず出会った彼女は幸せ者なのかもしれない。



渡邊広樹さん（人文学部人文社会学科4年）
茨大生5人で結成された「club' 89」のボーカルと作詞作曲を務める。結成前は主に茨大の「フォークソングクラブ」でコピーバンド活動をしていた。

■「音楽をやめない」という決断

大学4年の春、「本気で歌手を目指そう」と決めました。他のメンバー全員の就職が決まって、バンドを続けられないと分かったときに、自分はどうしたいかを考えたんです。僕は教員になりたくて茨大に來たし、教育実習も行ったんですが、音楽を諦めて働いている自分を想像したら、心苦しかったです。僕が求めるのは「安定」よりも「楽しさ」。もちろん、かなり迷いましたがね。覚悟を決めてから気持ちがスッキリして生きやすくなったから、この決断は正しかったんだと思います。

■原点は父親の車

子どものころ、父親の車で尾崎豊の「15の夜」をずっと聴いてました。他にもスピッツ、ミスチルとか。あの頃聴いていた曲たちがなければ今の音楽スタイル、ジャンルにはなってなかったと思います。

今でもその時聴いていた曲は好きですが、僕の中にはその曲たちに負けない、それ以上と思える音楽のイメージが湧いているんです。それを形にしたくて音楽をやっています。だからお客さんよりもまずは自分たちが楽しめるような曲を作っています。

家族は僕の夢をすごく応援してくれていますね。バンドをやり始めたときは、ほぼ毎回見に来てくれました。ダメ出しされることもあるけど、大きな支えだと感じています。

■ステージ上ではある意味「ニセモノ」

ライブ中は普段と違う自分になれます。ステージに立つと、日常では絶対ありえないくらいのパワーや元気が出るんです。だからステージに立ってる時の自分を一言で表すと「ニセモノ」。

ライブの後は見てくれた人から、色々な評価をいただきます。以前、「〇〇っていうバンドに似てるね」と言われたことがあるんですが、それは悔しかったです。優れたバンドの影響を受けることはあるけど、二番煎じはしたくないから。オリジナリティーは絶対に必要ですね。

■原動力は「自信」

音楽続けて人生棒に振らないかって想いはありました。けど自信があったんですよ。俺は才能あるから大丈夫だ、と思えたんです。

フェスに出れば自分よりレベルの高い人たちがいて、自信を失いそうになるけどそれも大事な瞬間。自分に無いものに気づいてそこから成長できるから、ちょっとワクワクするんです。

自分に自信が持てるのは、周りの人のおかげ。「音楽をやめたらもったいないよ」って言ってくれる人や、評価してくれる人がいるから頑張れるんです。

彼のように、「自分に自信がある」と胸を張って言うことはそう簡単なことではない。彼は自分のやりたいこと、つまり、音楽と向き合い続けた結果、夢を見つけた。応援してくれる大切な仲間や家族の存在に出会えた。自分がやっていることに、自信を持たた。

私たち大学生が自分の将来について選択するとき、「好き」「やりたい」という気持ちがどう作用するのか。やりたいことをやっけていてもどこか不安な人、上手いじゃない人も、「好き」という気持ちを信じて真摯に向き合っていれば、その先に自信や希望が見えてくるのかもしれない。

1

企画会議



毎週月曜日と木曜日の昼休み、編集員たちが集まって企画の内容を決めます。ここでは、特集企画のテーマ・連載企画の内容・読者のみなさんに伝えたいことなどを話し合います。今号は、なかなか企画の案が浮かんでこず、編集員は頭を悩ませました…。

主な会議場所は、図書館のグループ学習室や、共通教育棟1号館にあるC-mail編集室です。

(C-mail編集室…編集用パソコンが8台完備されている部屋。)

2

取材



↑取材の様子。場所は共通教育棟1号館のラーニングcommons。

企画が決まれば、いよいよ取材が始まります。取材内容が足りていないとい文章は書けません。取材で大切なことは、相手とどれだけと仲良くなれるかということ。「取材」と言っても楽しくおしゃべりする感覚で、相手の思いがけない魅力やエピソードを引き出すことを心がけています。

取材は大学内で行うことが多いですが、時には遠方へ出張することも。取材相手は、ひたすら知り合いをつたったり、Twitterを使ったりして探しています！

たくさんの茨大生に取材をしていると、茨大のなかには色々な経験や考え方を持つ人がいるということを実感させられます。

また、写真も記事を構成する上で大事なもの。現在のC-mail編集部には、カメラを使いこなせる人が少なく、今号ではカメラ歴5年の足立編集員(写真)がかなり奮闘してくれました！

他の編集員は、カメラ勉強中なので次号からの活躍にううご期待！



茨城大学の広報誌だというのに、誰がどんな風に乗っているのか分からない…。
謎に包まれた「C-mail」が出来上がるまでの過程を大公開！

3

編集



パソコンを使って編集中の1年生。慣れない作業に奮闘してくれました…！

取材が終わると、文章の作成に入ります。いかに取材相手の人柄を文章で表すことができるかがカギ！

編集ソフト「Illustrator」と「Photoshop」を使って写真と文章を上手く組み合わせ、記事の形にしていきます。

編集ソフトの使い方は、他の編集員が教えてくれるのでパソコンが苦手な人でも大丈夫です。編集ソフトにはさまざまな便利機能が搭載されていて、知れば知るほど奥深いものです。

4

赤入れ

「赤入れ」とは、出来上がった記事を添削する作業です。写真の配置に工夫ができないか、誤字・脱字がないかなどを編集員全員でチェックします。また、教員編集員のみなさんや学生支援センターの方も記事を添削してください。大学広報誌なので、学生支援センターとのやりとりが重要なところもC-mail制作の特徴。時にはキツイダメ出しもありますが、この添削コメントをもとに修正を繰り返し、よりよい記事に仕上げていきます！



赤入れされた記事の数々。

5

完成！

出来上がった記事のデータを印刷所に送り、ついに完成です！編集員たちは、0からなにか1つのものを作り上げた達成感を噛み締めつつ、また次号の準備にとりかかります。途中参加もOKなので、C-mailに興味を持ってくれた方はぜひ編集部までご連絡ください！（連絡先は裏表紙に記載）

ちなみに、C-mailは半期に1回の発行です。1冊を作り上げるのにゆっくりに時間をかけられます。配布場所は、各学部のラウンジ・図書館・茨苑会館・学生支援センター前などです！

MY FAVORITE

「とにかく、私は珈琲を高く評価している」 — セーレン・キルケゴール

今回のマイフェバのテーマは、「珈琲」です！

「なんとなく苦手・・・」という人が多いのではないのでしょうか？

今回は、「珈琲が苦手な人の一歩のきっかけになれば」と茨大生の至福の場であるサザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェの大山さとみ店長と、珈琲に魅了された学生との会話を取材しました。

— 珈琲の魅力は？

大山：「珈琲を淹れると落ち着く」ということ。それに尽きると思います。

イライラしていても、珈琲を挽いて、その香りを嗅ぎながら、淹れる。そして、飲む。

シチュエーションに合わせて旬の種類を選び、その豆に合った温度で抽出するので、どんな気分の時にでも、心を落ち着かせてくれます。

阪井：確かに、ものすごく落ち着きます（笑）。

珈琲は、動揺が味に出してしまいますし、淹れる時は精神を研ぎすませるので、コーヒーが完成した時には冷静になっています。それに加えて、「豆の国の歴史」も、味以上に魅力的です。

「この豆ができるまでには、こんな困難があったのか」と知ってから飲むのと、知らないで飲むのでは、味が全く違います。



株式会社サザコーヒー
茨城大学ライブラリーカフェ店
大山さとみ店長

— 珈琲へのこだわりは？

大山：私たちは、コロンビアに自社農園を持っています。収穫、精製、焙煎まで全て「自分たち」で行います。それは日本企業の中では、唯一サザコーヒーだけです。その国を「観て」「触れる」ことが、美味しい珈琲を淹れることに繋がると思います。また、それだけに、「自分は会社とお客様を繋ぐんだ！」という「責任」もあります。

阪井：流石です。

自分はまだ趣味にとどまっていますので、
まだまだですが、こだわりとしては「素材の味」を最大限に
引き出すようにしています。
珈琲そのものの甘さ、コクやキレを活かしたい。
持ち物じゃなくて、その人自身を見る、といった感じです。
そのため、ミルク・シュガーの特性には細心の注意を払い、
誰でもほぼブラックで楽しめるよう、日々心がけてます。(笑)



教育学部学校教育教員養成課程
国語専修1年 阪井一仁さん

—好きな豆の銘柄は何ですか？

大山：ホンジュラスです。

さわやかな酸味と、すっきりとした、キレのある飲み口。非常に、美味しい豆です。

阪井：そうなんですね。ホンジュラスは、まだあまり飲んだことがありません。(笑)

自分は、ルワンダが好きです。

大山：ルワンダですね。サザコーヒーでも販売していますが、フローラルな香り、
シナモンを感じさせる味わいが特徴ですが、その中でアフリカの大地を思わせる
後味がありますよね。

阪井：そこが、大きな魅力ですよ。(笑)。

また、ルワンダは、珈琲ができるまでの歴史が、また深い。
それが、フレーバーと重なり、独特な世界を現前させてくれるので、
非常に好きな銘柄です。

大山：確かに、ルワンダは内戦等、大変でしたし、
そういう「歴史」に触れることも、
珈琲の魅力の一つですよ。



ルワンダ。独特な土壌からの香りと、さわやかでキレのある、シナモンのような酸味が特徴。

サザコーヒーでは、朝いちコーヒーとして、
期間限定で提供されている。
(今の時期は違う豆の珈琲を販売。)

—最後に、珈琲が苦手な人へ

大山：是非一度、

サザコーヒーのこだわりの珈琲を飲んでください！

阪井：「キライ」「飲めない」という先入観に捉われず、

是非、美味しい珈琲に立ち会ってください！

ドイツの哲学者、フリードリヒ・ニーチェは、『権力への意思』冒頭において、
「事実というものは存在しない。存在するのは解釈だけである。」という言葉を残しています。
「苦手」とは、思い込みが作るもの。「なんとなく珈琲が苦手」という方、是非一度
思い込みの穴から抜け出て、「珈琲」の魅力を味わってみてはいかがでしょうか？

Life Place

国際交流会館

国際交流会館という施設をご存知でしょうか。国際交流というと堅苦しく感じてしまう人も多いと思いますが、ここでは多くの留学生と4人の日本人チューターが仲良く生活しています。今回は、知られざる国際交流会館での暮らしをご紹介します。



基本情報

- ・水戸キャンパスから徒歩 15 分
- ・合計 87 室（単身用・夫婦用、家族用）
- ・談話室、集会室、和室は交流の場として利用されている
- ・茨大生の会館チューター男女 2 人ずつ
- ・選考の上、留学生は半年間または 1 年間、チューターは原則 1 年間入居することができる
- ・七夕やクリスマスにはパーティーが開かれる（一般学生にはポスターでお知らせ）



多田将希さん
(人文学部2年)

スッパーブ ガンタポンさん
(タイ出身、茨城に来て1年目)



Q. 会館チューターになったわけは？

A. 多田：もともと国際関係を学びたいと思っていて、去年から、もっと留学生と関わりたい、国際交流会館に来たい、と思っていた。そこで、チューターになれば何かが変わるでしょう！と思って始めた。

Q. 2人が仲良くなったきっかけは？

A. 多田：ガンとはいつの間にか仲良くなった。4月の歓迎会で彼はお酒が飲めなかったけど、すごく歩み寄ろうと頑張っていた(笑)。だから、彼とも仲良くしようと思って遊ぶようになった。みんなで遊ぶことが多いけど、ガンと2人で出かけるとしたら、自転車旅をしたい。ほとんどの留学生は茨大から堀町周辺しか知らないから、水戸を連れ回したい。

Q. 国際交流会館に住んでみて感じたことはありますか

A. ガン：日本人は、「今度行こう！」とか、「今日飲みたいなあ…」とか、言い方がすごく曖昧。タイでは誘うときに、「今週行こう」とか、時間の範囲は決める。日本に来る前は、日本人は人間関係が難しいと思っていたけど、実際はそうではなかった。日本人にがっかりしたことも無い。多田：コイツは約束にうるさい！だから最近は「そのうち行こう」って言うようにしてる(笑)。国の違いが生活習慣の違いに直結すると思っていたけど、最近、意外とそうでもないと思う。その人の性格によるのが強いかな。だから、会館に住んでから外国人に対する偏見は減った。そういう枠で見るのはあんまり良くないなって。

国際交流会館では、さまざまな国の学生と一緒に当たり前の暮らしを送っています。このような施設やチューターの制度を知ること、国際交流をより身近なものとして捉えていただければ幸いです。

The FASHIONISTA of IBARAKI univ.

ひとみんさん
(3年)

- ① JEANASIS
- ② 赤のベルト
- ③ 好きなものを着る



安蔵恭吾さん
(3年)

- ① psyco bunny
- ② 帽子
- ③ 季節感を大切にする



Jさん(1年)

- ① UNIQLO
- ② お祭りなので甚平
- ③ 色合いに気をつける



イケザワさん
(3年)

- ①メイドイン池澤
- ②醤油の匂い



インディー
ジョーンズさん
(3年)

- ①特に無し
- ②毎日同じ服を着る
- ③大切に物を使う



ターゲットは 理学部の皆さん

かとうさん
(2年)



Tシャツは
映画「La La Land」
のロゴ入り！



- ①ヨウジヤマモト
- ②Tシャツ
- ③重くなりすぎない
ようにする

マイゼミ

～茨大のゼミや研究室を紹介～



理学部

理学科

地球環境科学コース
あんどう ひさお

安藤寿男教授

研究の概要

安藤研究室では主に地層と化石について扱っています。地層については、陸上での露頭（崖や岩盤）観察や地下、湖底、海底の掘削調査の成果から、堆積物とその成因、形成過程、含まれる化石などを調べ、ある地域が昔どんな環境だったのかを考察します。また、化石については化石や化石層の形成過程を調べ、昔の生物の生態や進化の道筋を明らかにします。化石は既に掘り出されたものを観察することもあれば、自分で発掘・採集しに行くこともあります。

普段のゼミではどんな活動をしていますか？

卒業研究や修士研究の進み具合を聞くことがメインですね。お互いに話し合って必要があればアドバイスをしたり、課題を提供したりします。課題を出すときは学生さんの今の状況を見て、無理なくその時点での力を出しきれそうなものを与えるようにしています。あとは、研究発表が近い場合はその練習をすることもありますね。

学生に求めていることは何ですか？

目標に向けて定常的に続けることです。ゼミは週1であるので、1週間の目標を自分で立ててそれに向かってコツコツやる。目標を決め、続けていく、安定して取り組める姿勢をつけることを求めています。

茨大生に伝えたいことはありますか？

一生懸命に取り組めば、後ろに足跡が残る。何事にも自信を持って挑戦して欲しいです。



発表練習の様子。発表後は研究生と安藤先生からの質問があり、その後発表の改善点について話し合う。

研究生の声



勝田瑛子さん
(学部4年)

安藤研の魅力を教えてください。

(増) 目で見て一番楽しいことができるのは安藤研じゃないかと思います。化石だったら見た目がものすごくきれいな化石とか、めっちゃかっこいいやつとかいっぱいあるし、化石より地層に興味がある人も、ものすごくきれいだったりかっこいい露頭もあるので。目で見て、手で触って、そこから捕らえていく作業が安藤研の研究の大きな特色なので、地質とか地層のダイナミックスを体で感じることができる研究室です。

安藤研を選んだ理由を教えてください。

(勝) もともと恐竜が好きで、茨大の地球環境科学コースに入ったのは化石からだったんです。でも、1年のときに授業で野外調査に行ったときに、海岸の崖とか山の中で見られる露頭とかが今目の前にあるのにそれが堆積したのは何千年前ってことを知って、これってすごく面白いなって思って。同じ時間空間にいるのに時代が違うのが不思議で、どうやってその地形ができたのかがそこから読み取れるのもすごく面白いなど。そこから安藤ゼミで地層をやろうと思いました。

研究室の雰囲気はどんな感じですか。

(増&勝) 一人ひとりの個性は強いと思います。でも、ぶつかり合うんじゃなくて調和している。みんな自由にやりつつ、全体としてみると良い感じに楽しくやっているように思います。



増川玄哉さん
(院2年)

安藤先生は学生から見てどんな先生ですか。

(増) 厳しいときはすごく厳しいですけど、ものすごく面倒見が良い先生です。お互いやり取りしているなかで研究を前進させる糸口を見つけたり。例えば、僕が卒業研究をしているとき、カナダで書かれたすごく古い論文が読みたかったんですけど、全然見つからなくて半ば諦めかけていたんです。でも、たまたまゼミの発表の中で常陸那珂のアンモナイトに似たものがカナダでも見つかるという話をやり取りの中で苦し紛れに言ったとき、安藤先生がその論文を持ってるかもしれないって言って、その論文を持ってきてくれたんですよ。安藤先生はやり取りがしやすい先生で、そういう面でも面倒見はいいと思います。

(勝) 安藤先生は学生の個性を捕らえるのがすごく上手で、一人ひとり何が得意で何が不得手なのかを考えてくれる先生で、それに応じて手の出し方や救い方を変えてくれていると、やりとりする中で感じています。学生のことをすごく良く見てくれている先生だと思います。



いばだめし

-Ibadai Meshi-

vol.4 [部活めし]

茨大生の食に関するあれこれを紹介する「いばだめし」。第4回目である今回は茨城大学ボート部の食事を紹介します。元気の出る手作り部活めしを教えてください。ボート部マネージャー主務・東山さんにお話を伺いました！



前と後ろにカゴがついた買い物用自転車は1年生マネージャーの私物。買い物はほぼ毎日で、大量の卵パックを無事に運ぶコツをマスターしたそう。

■漕艇部では「ご飯が手作りなのですか？」
はい。部活がある日は作っています。朝練がある日はお弁当も作ります。食事是一種のトレーニングと捉えていて、それぞれの選手が必要な量の食事を作っています。

■誰が作っているのですか？
基本的にマネージャー内で当番制なのですが今は1年生に任せています。ご飯は料理がとでも上手くなりますよ。具材を切るスピードがとでも速くなるんです。朝の5時くらいからモーニングが始まるんですけど、その時に朝昼分の食事を作ります。主菜と副菜2つ、汁物、それに糖質補給のためのべっこう飴を作るんです。作りながら時短するためには工夫するか考えるのが結構大変ですが慣れると1時間位で作れるようになります！身に着いた考える癖は実生活でかなり役に立っています。

■何を参考にしているのですか？
十数年前の人が、栄養量を計算できるエクセルのシートを作ったので

それを使ったリクックパッドを使ったりして考えています。この間作ったわらび餅は1年生が作り方を知っていたので作ってみました。

■たくさん食材が並んでいますね。

一食あたり全員でお肉は約3キロ、お米は26合くらい使います。ずっと受け継がれている古いガスの炊飯器で炊くんですよ。オレンジと牛乳のパックは多いとき1日8パックずつ買うので買い物が大変なのですが、選手からふとした瞬間においてほしいと思います。夢中でマネージャーの仕事をしていてあれ、私何やってるんだろう？って思ったときもありましたけど、後悔とかは全くないです。私はもう少しで引退だから今日は下級生に振舞う最後の夕食。最初はみじん切りのやり方もわからなかったけれどここにきていろいろなお話を教えてもらいました。でも自分のために1人分のご飯を作ろうと思うとすごく作りすぎちゃうんですよ。味噌汁を3日分くらい作ってしまった！..これはボート部マネージャーあるあるです(笑)。

■今日は桃もたくさんありますね。

先日お世話になっていた方に2箱頂いたんですよ。夕飯で1箱食べきっちゃうんですけど(笑)。隣で畑をしていらっしゃる方にも野菜を頂いたり、縦の繋がりも強いのでO.Dの皆さんからも差

し入れを頂いたりしますね。

■おいしくて簡単に作れるおすすめメニューがあれば教えてください。

うーん、メニュー数が多いのと作るのが一人暮らしの人とは大分違うので悩みますね..。簡単に作れるものなら、揚げナスは前作ってとても美味しかったのでおすすめです。ちなみに部内の人気メニューは豚キムチです。是非作ってみてください！



メニューは夏野菜のカレーとはるさめの煮物、卵サラダ、和え物、桃。疲労回復に効果的なトマトを使った料理を出すこと、味の系統を揃えないことがポイント。

漕艇部部室、網戸もエアコンもないけれど居心地は抜群。



学生支援センターからのお知らせ

大学周辺での犯罪被害は実際に起きています！
「自分は大丈夫」と思わないでください。

～最近の茨大生の犯罪被害事例～

- ・ 23 時 30 分ごろ、水戸市渡里町にて路上で痴漢被害に遭う（5 月）
- ・ 深夜 0 時ごろ、水戸市袴塚にて路上で痴漢被害に遭う（6 月）
- ・ 日立市中成沢町にて、アパートの鍵が壊され盗難被害に遭う（6 月）

☆身を守るために☆

室内にいるときも施錠する

防犯ブザーの携帯

（学生支援センターでも配布しています）

不要・不急な深夜の外出は控える



交通事故に注意しましょう。
ルールはきちんと守ること！

～最近の茨大生の交通事故事例～

- ・ 13 時ごろ、水戸市渡里町で自動車ですり抜かれた際に右から来た自転車と接触
- ・ 18 時ごろ、水戸市袴塚で自転車で交差点に進入した際に右から来た自動車と衝突

☆車も自転車もバイクも原付も☆

慎重な運転を心がける。交通ルールやマナーを守る。

自分の身は自分で守り、

健やかな学生生活を送りましょう！



編集後記

今回取材したどの団体のみなさんも、幾多の困難を乗り越えアツク活動していました！
そこで、編集後記では「編集員たちの困難」を紹介します。



佐藤夢加

(人文/人コミ 2年)
編集長やるの超困難でした。



岩澤英樹

(人文/社会 2年)
眠気との闘い。



足立晶

(人文/人コミ 2年)
芸術家だから、部屋が汚い。



杉内裕介

(人文/人コミ 2年)
暑すぎうち



高澤真悠

(人文/社会 2年)
足し算引き算が出来ない。



長永勇太

(人文/社会 2年)
ああああああああ



海老澤京佳

(教育/養教 2年)
自分自身が困難。



久野明有実

(人文/社会 2年)
毎日が困難。



臺緋里

(人文/現代社会 1年)
ハエが追い払えず同様。



梶山未歩

(人文/人間文化 1年)
食費と食欲のバランスが取れない。



阪井一仁

(教育/国語 1年)
我孫子からの通学。



内藤薫子

(人文/法律経済 1年)
食べ残しを腐らせちゃう！



外間花怜

(人文/人コミ 4年)
卒論が進まない。

■教員編集員

人文社会科学部	塚原	伸治
教育学部	上栗	伸一
理学部	木村	真琴
工学部	小林	薫
農学部	中平	洋一

C-mailは、学生が編集を行う茨城大学の情報誌です。

Special Thanks

取材にご協力いただいた皆様

巻中、学年は取材時のものです。


茨城大学学生広報誌

C-mail 次号編集員 大募集中!

C-mail とは？

Campus mail の略で、学生が企画・取材・編集を行う広報誌です。
大学の公式の印刷物として扱われています！

- ★ 専門的な知識は不要！編集員もほとんど未経験者でした。
- ★ 写真や文章が好きな人、デザインや企画をやってみたい人大歓迎！
- ★ 編集作業に興味のある方は、下記のメールアドレスからご連絡ください。
Twitter のフォローもお待ちしております！

✉ c_mail_ibadai@yahoo.co.jp  [@c_mail_ibadai](https://twitter.com/c_mail_ibadai)

The page is decorated with various sizes of stars. Some are solid black, while others are white with a black outline. They are scattered across the page, with a higher concentration around the central text. A solid black vertical bar is located on the far right edge of the page.

C-mail

2017 A/W

No. 218